

# 中室水穂

本名

中室義穂

なかむろ・みずほ

なかむろ・よしほ

書家、日展会員

## 経歴

生:昭和10年(1935年)10月2日、福山市生まれ

没:平成17年(2005年)12月21日、享年71歳

昭和29年(1954年)	18歳	広島県立福山誠之館高等学校卒業
昭和32年(1957年)	21歳	桑田三舟先生に師事
昭和37年(1962年)	26歳	日展初入選(以後31回)
昭和39年(1964年)	28歳	水之会創立
昭和39年(1964年)	28歳	第1回個展開催(以後昭和56年まで毎年開催)
昭和49年(1974年)	38歳	第1回日本書道美術館展文部大臣賞
昭和52年(1977年)	41歳	日本書芸院展大賞
昭和54年(1979年)	43歳	むつき集出版
昭和57年(1982年)	46歳	第20回記念個展開催
昭和57年(1982年)	46歳	パリ芸術祭出品
昭和57年(1982年)	46歳	ボザール賞
昭和58年(1983年)	47歳	毎日日本書展賞
昭和59年(1984年)	48歳	日本かな書道会展大賞(第1回)
昭和60年(1985年)	49歳	読売書法展 理事・審査員
昭和60年(1985年)	49歳	日本かな書道会展大賞(第2回)
昭和61年(1986年)	50歳	「水の色」出版
平成2年(1990年)	54歳	日展(第22回)特選
平成3年(1991年)	55歳	福山文化賞
平成6年(1994年)	58歳	日展(第26回)特選(2回目)
平成8年(1996年)	60歳	日展委嘱
平成9年(1997年)	61歳	日本書芸院常務理事
平成14年(2002年)	66歳	日展審査員

—	—	書道笹波会理事長代行
—	—	日本書芸院常務理事・審査員
—	—	読売書法展常任理事・審査員
—	—	広島日展会代表
—	—	広島県書美術振興会副理事長
—	—	福山笹波会常任顧問
—	—	水之会主宰

## 「書人生」

中室 水穂 （昭和29年卒）

私は「書」を書くことを職業として、半世紀を過ごしてきました。

日常、子供達にはお習字を教え、大人には「書」を教えています。その過程で、書美を構成する用具・用材(筆・紙・硯・墨など)全般にわたって、今日まで自分が学んで来たこと、また、学びつつあることをできるだけわかりやすく伝えます。また、私自身の書作を展覧会で発表したり、時には作品を買っていただいたりしながら生活しています。

私の理想は、良寛さんのようになりたいということです。子供と遊び、歌を詠み、自由に書を書いたりすることです。それを誰かが喜んでくれ、昨日は大根、今日はお米、明日は銭少々が軒下に置いてある。そんな生活を夢んでいます。しかし現実は大きな組織の中で、勝手気ままに出来ない自由のない生活をしています。

今は、東京から九州までの各地で教室を開くことが出来、そのお陰で日展の審査員にさせていただいています。年と共に役職も増え、浮世の多忙を極めております。普通の会社勤めならば、定年退職後の悠々自適といった年齢ですが意に反して現役です。

たいした才もないのに、書に志して50年、未だ道半ば、今なお、書の魅力が私を捕らえて放しません。

私は子供の頃から字を書く事が好きでした。父が俳句を嗜み、字を書くことが多かったことが影響していることもたしかですが、中学の時の作文に「書道で世に立つ」と書いて、後に当時の先生が、初心を貫いた先輩として生徒に話をされたと聞いて「いろは」も知らない子供に、それ程の意識があったかどうか妙な気持ちになったことを憶えているから不思議です。

昭和26年(1951年)に誠之館(当時は福山東高等学校)へ入学しました。その時の書道部の顧問は浮乗水郷先生でした。先生は大変熱心で全国的に有名な書家を招いて講習会や講演会を開かれていました。

桑田笹舟先生や村上三島先生等、今思うと驚く程の大家が揃って講師として来られたのが思いだされます。浮乗先生はその後上京され、東京で一家をなされたが早く亡くなられ大変悔やまれます。

22才の時、桑田三舟先生(現日展常務理事)と先生のお父上、故桑田笹舟先生(福山名誉市民)の指導を受けることになりました。当時若くて火の出るような情熱で書に励まれる三舟先生の門を叩き、有形無形の数々の教えを受けたことが、今の私の骨肉となり、心の宝、書の源でもあります。

書家を志したのですから、書の勉強をするのは当然です。さまざまな方法を考えては自分に挑戦しました。日展特選勉強の為に2尺×6尺の紙に千枚書きを試みたり、色紙千通り書きや、連続12時間書き等々。毎日8時間は書に関する勉強の時間とするのは当然のことです。会社勤めの人でも8時間働くわけですから。

その他「書は諸なり」で何にでも興味を持つ努力も大いに書に影響しましたが、特に古筆(王朝貴族の書いたもの)を勉強することは絶対不可欠です。古筆は一言で表現出来るものではなく、大変奥の深いもので、汲めども尽きぬ不可解さが興味となり、王朝人と対面しているような、一種の謎解きの面白さに惹かれてのめり込んでいくのです。

特にかな仮名書には専用の、金銀彩色文様の豪華絢爛な料紙があります。これを使いこなすのも大変だけど、墨を含んだ筆をおろす時のわくわくする気持ちは書家でなくては理解出来ない世界です。

「文は人なり」という言葉と同じように「書は人なり」で書いた人その人と対面するようなのですが、自分の書いたものを後日見ると、たまらなく嫌に見えたりして筆を持つのが嫌になることもあります。それでもまた、気を取りなおして精進します。

今までいかに多くの人々の力を借り、支えられたり、家族に助けられたりしてやっと緒についた所で、そう簡単にやめるわけにはいきません。この道には終わりはありません。

日進月歩、1日休めば3日の退歩とは桑田笹舟先生のお言葉です。生涯現役、一本の道を命尽きるまで探し求めて行きたいと思っております。(出典1)

出典1:『誠之館創立百五十周年(誠之館同窓会会報特別号)』、115頁、「書人生」、中室水穂、福山誠之館同窓会編刊、平成17年2月

2005年5月30日更新:本文・出典●2005年12月22日更新:経歴●2006年5月25日更新:タイトル・連絡先(削除)●2008年2月21日更新:経歴・本文●